

千川福祉会 社会福祉施設サポートインターシップ

プログラム概要：主に知的障害のある方が利用する就労継続支援B型事業・生活介護事業における作業活動支援(補助)、知的障害のある児童・生徒の利用する放課後等デイサービス事業所での活動支援(補助)

実習先：ワークイン関前、ななほしワークス、ワークイン中町、八幡作業所、千川さくらんぼクラブ
 実習先情報：社会福祉法人 武蔵野千川福祉会
 参加人数：10名
 学部学科：日本文学文化学科、幼児教育学科、人間科学科、社会福祉学科（順不同）
 実習期間：令和7(2025)年8月25日(月)～9月17日(水)
 本学担当教員：本多 勇(通信教育部人間科学科)

武蔵野千川福祉会 千川さくらんぼクラブ フィールドスタディーズ実習成果報告

人間科学科 学籍番号2531073 氏名 佐藤 きよら
 人間科学科 学籍番号2531206 氏名 岩澤 柚葉



○はじめに

今回、私たちは社会福祉法人千川福祉会が運営する、千川さくらんぼクラブにて、17日間の実習をした。実習先では、小学生から高校生の障害をもつ子供の利用者さんとの交流を通して様々なことを学んだ。

○実習内容

主に活動のサポート、交流

今回の実習は、夏休み期間である8月から学校が始まる9月にかけて行いました。8月の夏休み中は、朝10時ごろから活動が始まり、まずは朝の会や朝の学習を行います。その後、本格的な活動に移ります。活動内容は曜日ごとに異なり、水遊びや散歩、調理など、様々な活動を行います。

9月に入ってからは、活動は午後から行われました。曜日ごとに様々な活動に参加し、子供達と一緒に楽しみながらそのサポートを主に行いました。

○経験したこと、学んだこと、など

・(佐藤)私が学んだことは大きく2つある。

1つ目は、障害を持つ人の中には上手く自分の気持ちを伝えることができない人がいる、とうことである。そもそも子どもは自分の気持ちを伝えることがまだ上手にできない子が多いため、子どものときは特に困ることがあるのではないかと感じた。障害によっては言葉が上手く相手に伝わらない人がいるなど、様々な理由でもどかしさを感じているかもしれない。周りの人が、その人の行動の背景を推測、検証して気づく必要があると思った。

2つ目は、支援をする際の関わり方である。利用者さんは、自分の身の回りのことなど、自分でできることがたくさんあった。その中でときどき声をかける必要があるシーンが見られたが、時間は多少かかっても、自分でできることがほとんどだった。だからこそ、利用者さんを見守る姿勢が大事だと感じた。

(→次ページへ)

○経験したこと、学んだこと、など(つづき)

・(岩澤)実習前は、子供達とうまく関われるか不安がありました。職員の方々が丁寧にサポートしてくださり、安心して実習に取り組むことができました。最初から無理に関わろうとせず、子どもたちが私に興味を持ち、近づいてきてくれるのを待つようにしました。実際に子供たちと接する中で、何気ない行動や言葉に笑わせてもらったり、考えさせられたりすることが多く、学びの多い時間を過ごしました。特に、子供たちの行動の裏にある気持ちや背景を想像しながら関わる姿勢の大切さを実感しました。また、子供たちは大人の様子をよく見ているということも改めて感じ、丁寧に接することの重要性を学びました。言葉以上に、態度や表情から伝わるものがあるということ強く意識しました。

○今後の展開、今後の学び、など

・(佐藤)私はもともと障害者支援に興味があったが、今後の進路の一つとしてさらに興味がわいた。もしまだ障がいをもつ人を支援する際には、その人のペースを尊重しつつたくさんコミュニケーションをとっていきたい。また、困ったときの対処法についてもっといい方法がないか、今後の大学での学習を通して探していきたい。

・(岩澤)今回の実習を通して、利用者の方との関わり方や支援の距離感について多くの学びを得ることができました。今後、支援を行う際には今回身につけた関わり方や姿勢を意識し、よりよい支援ができるよう努めていきたいです。

また、障がいのある人たちは非常に個性が豊かで、他者に影響を与える力を持っているということ強く実感しました。支援する側とされる側という一方向の関係ではなく、互いに学びあい、理解しあう関係性の大切さを今後も大事にしていきたいです。そして、障がいのある人たちに対する「かわいそう」といった固定観念に対して、問い直す視点を持ち続け、それを周囲にも発信していきたいと考えています。

○まとめ

今回の実習では、子供たちとの関わりを通じて、非常に充実した時間を過ごすことができました。自分自身の視野が広がり、多くの学びがありました。今後も積極的に学びを深め、今回の実習で得た経験や気づきを将来の支援や関わりに活かしていきたいです。

○担当教員コメント(担当教員:通信教育部社会福祉専攻・本多 勇)

長期FS実習、お疲れ様でした。それぞれの施設(事業所)で過ごさせていただく中で、多くの学びを得られたことが伝わってきました。

事前学修では、「働くこと」「暮らすこと(生活)」「働くことや暮らすことを支えるのに大事なこと」について考え、FS実習の準備としました。

佐藤さんは、実習当初は利用している子どもたちそれぞれの特徴が分からなくて関わり方が難しかった、1週間くらいすると分かってきた、と報告がありました。関わりが難しかった利用者が、実習4週目になって「遊びに誘ってくれて、嬉しかった」という報告もありました。その人(その子)なりのコミュニケーションの方法があることの気づきがあったようです。また、障害のある人の「行動」の「理由」があることの気づきも得られたようです。

岩澤さんは、実習当初は利用者の子供たちとの「距離の取り方」に戸惑ったようでしたが、相手から近づいてくるのを待って見たら、上手くコミュニケーションやかかわりができたと報告がありました。相手の感情を受けとめる経験もあったようですが、それには「何か理由がある」ということが理解できたようです。

千川福祉会プログラムに参加された皆さんは、それぞれに「自分の中にある思い込み・偏見」に気づき、コミュニケーションや会話、同じ活動を経験することで、「障害のある方々」への印象や姿勢が大きく変わったことが伝わってきました。

今後の学科での学び、社会での生活、卒業後の実践・仕事につながる多くの示唆があったことと思います。今後の活躍を応援しております。

フィールドスタディーズ実習をお受けいただいた、社会福祉法人武蔵野千川福祉会および【千川さくらんぼクラブ】のスタッフのみなさま、利用者みなさまに、心より感謝いたします。



千川福祉会 社会福祉施設サポートインターシップ

- プログラム概要： 主に知的障害のある方が利用する就労継続支援B型事業・生活介護事業における作業活動支援（補助）、知的障害のある児童・生徒の利用する放課後等デイサービス事業所での活動支援（補助）
- 実習先： ワークイン関前、ななほしワークス、ワークイン中町、八幡作業所、千川さくらんぼクラブ
- 実習先情報： 社会福祉法人 武蔵野千川福祉会
- 参加人数： 10名
- 学部学科： 日本文学文化学科、幼児教育学科、人間科学科、社会福祉学科（順不同）
- 実習期間： 令和7（2025）年8月25日（月）～9月17日（水）
- 本学担当教員： 本多 勇（通信教育部人間科学科）

武蔵野千川福祉会 ななほしワークス フィールドスタディーズ実習成果報告

日本文学文化学科 2513068 長瀬 嘉音
 日本文学文化学科 2513069 西林 莉那

○はじめに

私たちは今回、社会福祉法人武蔵野千川福祉会が運営するななほしワークス（生活介護事業所）へ17日間実習に行った。

○実習内容

ダイレクトメールなどの封入・封緘・ラベル貼りの仕事の他に、クラフトや曜日ごとに違う活動を行った。活動の内容は、アート（紙コップを使った風鈴作り・本のしおり作り）、運動（サッカーボウリング・足踏みパネル）、音楽（音に合わせて体を動かす）、カラオケ活動などであった。

○経験したこと、学んだこと

利用者さんと接するにあたって、目があったら手を振って、利用者さん一人ではできないことを一緒にやって、利用者さんの興味のある話や雑談等をする中で、「あなたのことを見ているよ」という意思表示をすることを意識していた。また、この施設の大半の方は知的障害を持っていて特に自閉症の方と接する時は、手を握るなどの身体的接触が利用者さんの安心につながったと思う。

作業活動を通して学んだことは、利用者さんに対して行動の提案をする時、「～しなさい！」ではなく「～してみて？」という形式で話をしたほうが行動がスムーズに進んだことである。また、経験したこととして、作業をする手が止まってしまっている利用者さんには催促をするのではなく「待ってるよ」という肯定的な声かけをすることが次の行動につながる手助けになることを知った。

気づいたこととして、人それぞれ独特なコミュニケーションのやり方があり、グータッチや自分の時計を「触る？」といった行動や、買い物活動などで施設から出たりするとき「いってらっしゃい、お帰りなさい」という声掛けをして、まるで第二の家のような温かさを感じたことが挙げられる。そして、利用者さんはイレギュラーなものに対して過剰に反応することが分かった。

○まとめ

私たちはこの実習を通して、自分の先入観で利用者さんの行動の可能性を判断してはいけないから、相手を尊重することが大切だと感じた。このことから、健常者と障がい者という括ることは良くないことであると言うことを偏見を持つ人に伝えたい。また、コミュニケーションをとることが利用者さんを知ることができる唯一のツールだから、手を握るなどの身体的接触も大切にすべき行動だと感じた。

○担当教員コメント（担当教員：通信教育部社会福祉専攻・本多 勇）

長期FS実習、お疲れ様でした。それぞれの施設（事業所）で過ごさせていただく中で、多くの学びを得られたことが伝わってきました。

事前学修では、「働くこと」「暮らすこと（生活）」「働くことや暮らすことを支えるのに大事なこと」について考え、FS実習の準備としました。

長瀬さんは、実習当初は障害のある利用者のみなさんにどのように接したら良いか戸惑ってしまっていたようですが、同じ活動に参加したり、共通の話題のコミュニケーションで盛り上がり、最終的に利用者の全員とコミュニケーションが取れたとのことでした。ネガティブイメージも、実際に関わることで払拭され、少しずつでも相手のことを知ることが大事だということの気づきがありました。

西林さんは、障害のある利用者のみなさんは、それぞれ「何に困っているのか・どうしたらよいか分からない」という状況が生じて、そしてそれにどう対応するかについて、気づきがあったようでした。自身のなかにある「偏見」に気づくとともに、実習中は「人と人としてコミュニケーションができた」とのことです。「勝手なイメージ」が払拭されたとの実感があったようでした。

千川福祉会プログラムに参加された皆さんは、それぞれに「自分の中にある思い込み・偏見」に気づき、コミュニケーションや会話、同じ活動を経験することで、「障害のある方々」への印象や姿勢が大きく変わったことが伝わってきました。

今後の学科での学び、社会での生活、卒業後の実践・仕事につながる多くの示唆があったことと思います。今後の活躍を応援しております。

フィールドスタディーズ実習をお受けいただいた、社会福祉法人武蔵野千川福祉会および【ななほしワークス】のスタッフのみなさま、利用者のみなさまに、心より感謝いたします。



千川福祉会 社会福祉施設サポートインターシップ

プログラム概要：主に知的障害のある方が利用する就労継続支援B型事業・生活介護事業における作業活動支援（補助）、知的障害のある児童・生徒の利用する放課後等デイサービス事業所での活動支援（補助）

実習先：ワークイン関前、ななほしワークス、ワークイン中町、八幡作業所、千川さくらんぼクラブ

実習先情報：社会福祉法人 武蔵野千川福祉会

参加人数：10名

学部学科：日本文学文化学科、幼児教育学科、人間科学科、社会福祉学科（順不同）

実習期間：令和7（2025）年8月25日（月）～9月17日（水）

本学担当教員：本多 勇（通信教育部人間科学科）

武蔵野千川福祉会 ワークイン関前 フィールドスタディーズ実習成果報告

社会福祉学科 学籍番号2533108 氏名 熊谷洸稀
日本文学文化学科 学籍番号2513200 氏名 藤原くるみ

〇はじめに

今回、私たちは武蔵野千川福祉会が運営するワークイン関前へ実習に行き、知的障害を抱える利用者さんたちと17日間共に働き、交流をしました。

〇実習内容

利用者の方と一緒に丁合、封入、封緘などの単純作業を行いました。手が空いた場合には職員にできることがないか確認し、ない場合には利用者と一緒に待機していました。

〇経験したこと、学んだこと、など

・知的障害の方々との作業や交流を経験し、相手に伝わりやすいコミュニケーションを学びました。例えば、問いかけや返した言葉に対しての返事がない方、なにを伝えたいのかわからない方、自分のルーティーンを守りたい方など、17日間という短い期間で信頼関係を築き、コミュニケーションを取ることは難しいことでした。

事務所の職員の方からアドバイスを受け、日にちを重ねるうちに少しずつコミュニケーションをとることに慣れていったことで、相手の反応から伝えたいことを考えてコミュニケーションの取り方を学びました。

・利用者との距離が縮まるきっかけが会話ではなかったことから会話を交えることだけがコミュニケーションではないということを強く実感することが出来た。利用者との距離が縮まってからは後ろをついてきたり走って追いかけてくる、途中まで一緒に帰るなど友達と接しているような出来事もあった。



○今後の展開、今後の学び、など

・今回、「障害を持つ方はなにに苦労し、困っているのかを知り、自分が障害を持つ方々にできることはなにかを考える」という目標を設定し、実習に臨みました。今回の経験を通して出した答えとしては「利用者さん一人ひとりの特性を理解し、柔軟に接すること」ではないかと考えました。今後の学びにおいては今回得た答えから新たな課題を見出せるよう、今回の経験を胸に刻んで学びを深めていきたいと考えています。

・外国人との会話と同じで伝わらなければジェスチャーを交えたり、簡単な言葉に言い替えるなど工夫をすればコミュニケーションが取れるため、障害があるからといって怖がる必要はないという理解を広める必要がある。

○担当教員コメント（担当教員：通信教育部社会福祉専攻・本多 勇）

長期FS実習、お疲れ様でした。それぞれの施設（事業所）で過ごさせていただく中で、多くの学びを得られたことが伝わってきました。

事前学修では、「働くこと」「暮らすこと（生活）」「働くことや暮らすことを支えるのに大事なこと」について考え、FS実習の準備としました。

熊谷さんは、障害のある利用者のみなさんとのコミュニケーションに当初苦労されていたようです。相手のどこに「こだわり」があるか知る必要があること、そして根気よく伝えることで、伝えること・コミュニケーションのできることに気づきを得たようでした。また、「就労継続B型事業所」の機能についても、理解を深めていました。

藤原さんは、すべての利用者のみなさんとコミュニケーション・会話ができたと報告がありました。実際に話したりジェスチャーを交えてのコミュニケーションをしてみると、最初の印象や「思い込み」が払拭されて、そのやり取りを愉しむこともできたようです。「話すだけがコミュニケーションではない」という気づきもありました。障害のある人と少しでも関わることで、その印象が大きく変わることを強調していました。

千川福祉会プログラムに参加された皆さんは、それぞれに「自分の中にある思い込み・偏見」に気づき、コミュニケーションや会話、同じ活動を経験することで、「障害のある方々」への印象や姿勢が大きく変わったことが伝わってきました。

今後の学科での学び、社会での生活、卒業後の実践・仕事につながる多くの示唆があったことと思います。今後の活躍を応援しております。

フィールドスタディーズ実習をお受けいただいた、社会福祉法人武蔵野千川福祉会および【ワークイン関前】のスタッフのみなさま、利用者のみなさまに、心より感謝いたします。



千川福祉会 社会福祉施設サポートインターシップ

プログラム概要： 主に知的障害のある方が利用する就労継続支援B型事業・生活介護事業における作業活動支援（補助）、知的障害のある児童・生徒の利用する放課後等デイサービス事業所での活動支援（補助）

実習先： ワークイン関前、ななほしワークス、ワークイン中町、八幡作業所、千川さくらんぼクラブ

実習先情報： 社会福祉法人 武蔵野千川福祉会

参加人数： 10名

学部学科： 日本文学文化学科、幼児教育学科、人間科学科、社会福祉学科（順不同）

実習期間： 令和7（2025）年8月25日（月）～9月17日（水）

本学担当教員： 本多 勇（通信教育部人間科学科）

武蔵野千川福祉会 ワークイン中町 フィールドスタディーズ実習成果報告

社会福祉学科 学籍番号 2533046

氏名 小林茉紘

社会福祉学科 学籍番号 2533068

氏名 沼倉優月



〇はじめに

私たちは今回、社会福祉法人武蔵野千川福祉会の生活介護作業所であるワークイン中町に17日間の実習に行って来ました。知的障がいのある方や、自閉症の方、ダウン症の方が、普段どのようなお仕事をされていて、どのような生活をしているのかを知る貴重な機会になりました。

〇実習内容

ワークイン中町は、お仕事だけでなく文化活動も行う作業所であった。

主なお仕事内容は、チラシの封入や封緘、ラベル張りなどで、新聞のお仕事のときは新聞を折る作業も利用者さんと協力して行った。また委託清掃として、マンションの清掃にも利用者さんと一緒に行った。

文化活動は曜日ごとに何をするか決まっていて、運動や美術、音楽をした。さらに、生活学習と課題学習の曜日もあり、身の回りのことやお勉強したり、算数のお勉強をしたりした。

〇提案したこと、発信したこと、など

実習が始まったばかりのときは、利用者さんたちがそれぞれどのような人たちなのか分からなかった部分も多く、接し方や声のかけ方に悩むこともあったけれど、日数を重ねるうちに、見えてくるものがあつた。

ある利用者さんが美術の時間に作品を作っていて、そのお手伝いをしていたとき、利用者さん自身の納得いくようにできなかった部分があり、「下手くそです！」と自分に向かって言っていました。それを聞いた私が、「とても上手にできていますよ。下手くそではありませんと言ってみましょう。」と提案すると、利用者さんは優しい声で、「下手くそではありません。」ともう一度自分に声をかけていた。

〇経験したこと、学んだこと、など

今回、ワークイン中町での実習を通して、利用者の方々と関わる中で「同じ対応は通用しない」ということを強く学んだ。利用者それぞれに特性や個性があり、その人に合った声かけや接し方が必要だった。実習前は、障がいのある方との関わりに対して「どう接すればいいのか」「拒否されたらどうしよう」といった不安や緊張が大きかった。

(→次ページへ)

(つづき)

しかし、実際には、握手やハイタッチなどで積極的に関わってくれる利用者の方も多く、その「自分らしさ全開」の姿に驚きつつも、楽しさや温かさを感じた。最初は戸惑い動揺してしまっただが、こちらが構えずに「知ろう」とする気持ちで接することで、自然にコミュニケーションがとれるようになっていった。

○今後の展開、今後の学び、など

今回の経験を通して、障がいのある方々との関わりは「特別なもの」ではなく、人と人との関わりそのものであると実感した。実習前に抱いていた「怖い」「難しい」というイメージは、現場での経験によって大きく変わった。実際に関わることで、自分の偏見や先入観に気づき、それを手放すことの大切さを学んだ。今後は、今回得た学びを大学での授業や生活の中にも活かしていきたい。特に「相手に合わせて接し方を変える」「まずは知ろうとする姿勢を持つ」ということは、障がいのある人だけでなく、誰と関わる場面においても重要なことだと考える。将来、福祉の現場に関わる可能性がある中で、この実習での体験を基盤にして、さらに実践的な知識やスキルを身につけていきたい。

○まとめ

ワークイン中町での実習を通じて、「人と関わるうえで大切なのは、相手を一人の人として知ろうとする姿勢である」ということを学んだ。利用者の方の個性や特性を尊重し、こちらの思い込みや偏見を手放すことで、関係性はより豊かになっていく。また、自分が動揺すると相手にもそれが伝わってしまうように、支援者の姿勢や態度は利用者には大きな影響を与えることも実感した。だからこそ、相手に向き合う際には、自分自身の心の構えや関わり方を常に意識する必要がある。今回の実習で得た学びは、福祉分野に限らず、今後の大学生活や社会に出てからの人間関係においても活かせるものであると感じている。

○担当教員コメント (担当教員：通信教育部社会福祉専攻・本多 勇)

長期FS実習、お疲れ様でした。それぞれの施設(事業所)で過ごさせていただく中で、多くの学びを得られたことが伝わってきました。

事前学修では、「働くこと」「暮らすこと(生活)」「働くことや暮らすことを支えるのに大事なこと」について考え、FS実習の準備としました。

小林さんは、当初「障害のある人がコワイ」というイメージがあったようですが、実際に実習が始まると「人と人との関わりが温かい空間」であると感じたようです。利用者のみなさんそれぞれ「個性が強く」いろんな方がいること、同じ対応をせずに個別に対応すること、について気づきがあったようです。

沼倉さんは、実習当初、利用者のみなさんが「自分らしさ全開」で迫ってきて動揺してしまい、自分の動揺が相手に伝わって利用者も動揺してしまったかもしれないという経験があり、「相手のことをもっと知ろう」という構えが大切だという気づきを得ていました。最後には「障害を持っているから」という変なフィルターをかけず「人間同士」、いつも通りの自分で接することが重要であることも理解を深めていました。

千川福祉会プログラムに参加された皆さんは、それぞれに「自分の中にある思い込み・偏見」に気づき、コミュニケーションや会話、同じ活動を経験することで、「障害のある方々」への印象や姿勢が大きく変わったことが伝わってきました。

今後の学科での学び、社会での生活、卒業後の実践・仕事につながる多くの示唆があったことと思います。今後の活躍を応援しております。

フィールドスタディーズ実習をお受けいただいた、社会福祉法人武蔵野千川福祉会および【ワークイン中町】のスタッフのみなさま、利用者のみなさまに、心より感謝いたします。



千川福祉会 社会福祉施設サポートインターシップ

プログラム概要：主に知的障害のある方が利用する就労継続支援B型事業・生活介護事業における作業活動支援（補助）、知的障害のある児童・生徒の利用する放課後等デイサービス事業所での活動支援（補助）

実習先：ワークイン関前、ななほしワークス、ワークイン中町、八幡作業所、千川さくらんぼクラブ

実習先情報：社会福祉法人 武蔵野千川福祉会

参加人数：10名

学部学科：日本文学文化学科、幼児教育学科、人間科学科、社会福祉学科（順不同）

実習期間：令和7（2025）年8月25日（月）～9月17日（水）

本学担当教員：本多 勇（通信教育部人間科学科）

武蔵野千川福祉会 八幡作業所 フィールドスタディーズ実習成果報告

幼児教育学科 学籍番号2538089

氏名 吉田 大輔

社会福祉学科 学籍番号2533016

氏名 宇多川 花梨



〇はじめに

私たちは、武蔵野千川福祉会が運営する就労継続支援B型の作業施設の八幡作業所で、約17日間実習を行ってきた。このFSに参加した理由は、障がいを持った方の特性を知りたいと思い参加した。

〇実習内容

主に利用者さんと一緒に作業をしていた。作業内容は、丁合・封入・封緘・ラベル貼りを主に行っていた。また、一緒に作業をする他に、会話をしながらサポートをすることもしていた。

〇提案したこと、発信したこと、など

- ・（吉田）「障がいを持っている」というだけで線引きをしてしまう方がいると思うが、障がいを持っていても同じ人間であるということを発信していきたいと思う。
- ・（宇多川）突然実習生として来た私を最初は少し緊張してあまり話さなかったりしたのですが、一週間も経てば話しかけてくださったり、絵をくれたりする等暖かく接して下さり最後はとても素晴らしい思い出になったなと感じました。障害を持っている人って急に大声で話したりして怖いからかわらないようにするという考えをもっていらっしゃる方もいると思いますがなぜそうしてしまうんだろと考えてみると案外わかりやすかったりしますよと個人的には思います。

〇経験したこと、学んだこと、など

- ・（吉田）利用者の方に多くの絵をいただく機会があり、その中に私の似顔絵があったことがとても嬉しかった。「とにかく仲良くなる」を目標にこのFSに参加し、しっかりコミュニケーションをとれているのか不安だった。しかし似顔絵をいただいた際に職員の方から、「不器用ながらこれ（絵を渡すこと）が彼なりの愛情表現なんですよ。」と言われ、とても嬉しく思った。

（→次ページへ）

(つづき)

・(宇多川) 障害者の方とコミュニケーション取れるかなと実習前は個人的に思っていたのですが少しでも話せる方がいたり、あとはジェスチャー等の自分の体を使った表現をしてくださる方がいて実習前よりも話すことができ個人的にはうれしいと感じましたしそれがわかってからの実習に対する不安というものはなくなっていました。更に職員さんの方の接し方というものが勿論怒るときには怒り、利用者さんが良いことをしている時には褒めるといった「飴と鞭」の使い方が非常に上手ですがだなと感じました。

○今後の展開、今後の学び、など

・(吉田) 私は将来、障がいを持った子どもと関わる仕事に就きたい。今回体験したことをそういった場所で活かしていきたいと考えている。また、そういった場所ではなくても、普段の生活で障がいを持った方に手を差し伸べていきたい。

・(宇多川) 自分は所属が社会福祉学科の人間なので3年生の時の実習やそれだけにかかわらず普段の授業にも活用することでより理解を深めていきたいと思います。

○まとめ

このFSを通して私はとても良い経験をさせていただいた。八幡作業所はとても優しい世界が流れているなど思った。しかし、外の世界に行けば冷たい目線を送られるなど、お世辞にも優しい世界であるとは言えない。どこにいても優しい世界が広がられていることを願っている。

○担当教員コメント (担当教員：通信教育部社会福祉専攻・本多 勇)

長期FS実習、お疲れ様でした。それぞれの施設(事業所)で過ごさせていただく中で、多くの学びを得られたことが伝わってきました。

事前学修では、「働くこと」「暮らすこと(生活)」「働くことや暮らすことを支えるのに大事なこと」について考え、FS実習の準備としました。

吉田さんは、実習を通じて「(利用者と)とにかく仲良くなる」という目標を掲げ、コミュニケーションや会話を試みたようです。実習前は「障害の症状・特性に興味があった」のが、実際に実習で利用者のみなさんと関わることで「人と人として話す」こと、「その人本人」に関心が変わったことを報告していました。

宇多川さんは、最初、「障害は似ている」と思っていたが、実際は「個性が異なっていて、コミュニケーション方法も違っていた」ことに気づき、そのことに関心が高くなったようです。実習を経て、「障害」は誰しもなるリスクがあること、健常の人もふとした瞬間に障害を負うリスクがあることについても理解を深めていました。

千川福祉会プログラムに参加された皆さんは、それぞれに「自分の中にある思い込み・偏見」に気づき、コミュニケーションや会話、同じ活動を経験することで、「障害のある方々」への印象や姿勢が大きく変わったことが伝わってきました。

今後の学科での学び、社会での生活、卒業後の実践・仕事につながる多くの示唆があったことと思います。今後の活躍を応援しております。

フィールドスタディーズ実習をお受けいただいた、社会福祉法人武蔵野千川福祉会および【八幡作業所】のスタッフのみなさま、利用者のみなさまに、心より感謝いたします。

